

《書評》

Michèle Mendelssohn,

Making Oscar Wilde

Oxford: Oxford UP, 2018.

堀 祐子

Making Oscar Wilde はオスカー・ワイルドのアメリカ講演ツアーに焦点をあて、彼の波乱に満ちた人生のなかでもターニングポイントとなる1882年にワイルドがどのような人と出会い、どのように過ごし、どのようにして世に知られる「オスカー・ワイルド」になっていったのかを、注意深く証拠を示しながら詳細に記述したものである。

ワイルドのアメリカ講演ツアーを扱った書籍は2010年以降、Matthew Hofer, Gary Scharnhorst 編の *Oscar Wilde in America: the Interview* (2010)、Roy Morris, Jr. 著の *Declaring His Genius: Oscar Wilde in North America* (2013) や David M. Friedman 著の *Wilde in America: Oscar Wilde and the Invention of Modern Celebrity* (2014) などが出版され、そのトピックに近年注目が集まっていることが見て取れる。それぞれインタビュー集やフィクション、アメリカのセレブリティとしてのワイルドに注目した書籍であり、Friedman の *Wilde in America* が一番形式としては近い。しかし、本書はワイルドについてのみ論じているというよりは、それを受け止めた周囲の状況も含めて事細かに再現していると言ったほうが良いかもしれない。ワイルドの行動だけではなく、どのような思考の下にそのような行動に至ったのか、またその周辺にはどのような背景を持つ人たちがいて、その結果ワイルドとどのような関係を結ぶにいたったのかをあぶり出そうとしているところが本書の特徴である。ワイルドと直接関係した人や事柄の分析に加え、過去にアメリカで起きた出来事や当時の他国の状況を詳細に調査して

おり、読者は時代や国境を超えて俯瞰するようにワイルドを見るのが可能となっている。また、巻末に付けられた膨大な数の脚注からもわかるように、多岐にわたる客観的証拠をできる限りあつめ、そこから推察される彼の内面も描こうという試みが要所要所に見られ、それはまるで壮大なドキュメンタリードラマを見ているような錯覚を起こさせるのである。

そのようなこともあってか、本書は2018年7月にオックスフォード大学出版局から上梓されると大変な好評を博し、米ペン協会賞の最終選考に残り、*Times Literary Supplement*や*Sunday Times*などが2018年のベスト・ブックとして取り上げたほか、*Guardian*のベスト・サマー・ブック、*Paris Review*のスタッフ・ピックス、BBCカルチャーのブック・トゥ・リードの1位に選ばれるなど、研究者だけではなく一般読者も興味深く読める本として高い評価を得た。

*New York Journal*の書評でポール・トマス・マーフィが言うように、アメリカ以外の事象（アイルランドの子供時代やロンドンでの生活、スキヤンダルや獄中生活など）を知りたいのであれば、Richard Ellmannの*Oscar Wilde* (1987)を参照すれば詳細を知ることができるのだが、本書の魅力はやはりアメリカにおけるワイルドの受容を写真や絵を使って視覚的に捉え直すという試みと、周辺の人々にもワイルド同様に目を向けることでワイルド像を洗い出すという点にあるだろう。

著者であるミシェル・メンデルスゾーンは、オックスフォード大学英語英文学部教授（マンスフィールド・コレッジ所属）であり、研究対象は19世紀後半から現代までと広範囲にわたる。主にアメリカ文学、アフリカ系アメリカ文学、イギリス文学、カナダ文学を研究対象としている。ケンブリッジ大学で博士号を取得し、フルブライト奨学金を得てのハーバード大学への留学を経てエジンバラ大学で勤務した後、現在のオックスフォード大学へ移った。2007年には*Henry James, Oscar Wilde and Aesthetic Culture*を刊行している。

そのような多岐にわたる好奇心と幅広い知識を有したメンデルスゾーンが、ワイルドの、特にアメリカにおける活動に興味を示したきっかけは1枚の絵だった。*The Aesthetic Craze*という題名がつけられたポスターを目にして以来、何年も頭から離れなかったというその強烈な印象は、読者も

興味をそそられるものである。ワイルドは黒人のダンディとして描かれ、大きなヒマワリを背後にいる黒人の洗濯女に差し出している。それは確かに一般的に知られるワイルド像とは全く異なっており、イギリスにおける彼を知っている者にとっては混乱させられるものだ。このポスターを皮切りに48枚にもなるワイルドの表象やそれに付随する絵や写真を全てカラー刷りで紹介しながら、筆者は彼がどのように人々に捉えられ、また自らを見せていったのかを丁寧に追っている。

本書は3部から構成されており、第1部は生まれてから渡米するまでの27年間を簡単にたどりながらワイルドがどのようにして高い自意識を持つに至ったのかを30頁ほどで説明し、第3部は帰国してからパリで死ぬまでの17年間を同様の枚数でまとめている。主題であるアメリカ講演には第2部全てをあて、140頁を費やしている。

「美の伝道師」であるワイルドは1881年12月24日、28歳の時に50日間の講演ツアーのためアメリカへ渡った。その頃、ウィリアム・ギルバートとアーサー・サリヴァンのオペラ『ペイシェンス』(*Patience*, 1881)でワイルドの奇抜な服装や言動が風刺されたことにより、彼の作品というよりは彼そのものが興味の対象となっていた。アメリカ側の代理人であるモース大佐は金儲けを企み、講演の聴衆から入場料を集めてワイルドと折半しようともちかけた。ワイルドはアメリカ人に馴染みのなかった「唯美主義」の講演をすることでアメリカの人びとを「文明化する」という名目で、この講演ツアーを引き受けた。また、彼のもうひとつの目的は、ロシアの皇帝アレクサンドル二世の暗殺事件に配慮して上演を中止されていた彼の最初の戯曲『ヴェラ、実は虚無主義者たち』(*Vera; or, The Nihilists*, 1880)の舞台契約を結ぶことであった。1882年10月に講演ツアーの全行程を終えたワイルドはニューヨークにとどまり、新しい劇場と『ヴェラ』の上演契約を結ぶことに成功し、ツアーで手にした大金を手に意気揚々と帰国の途についた。

以上のことは、ワイルドのアメリカ講演ツアーについて一般的に知られていることであり、メンデルスゾーンの本領はここから発揮される。15年前に大成功したチャールズ・ディケンズのアメリカ講演やその時の聴衆の反応と比べ、最初のワイルドのニューヨークでの講演がやや期待外れと受

け止められたことを描くところから始まり、アメリカ人の求めるキャラクターを演じることで知名度は上がったものの、同時にアイルランド人である自覚を否定なくさせられて帰国するまでの様子を事細かに描き出している。

第6章で言及されているように、彼の人生で受けたインタビューの95%がアメリカでなされたものであることは興味深い。彼は日々数多くのインタビューを受けることで、自分の発言がどのように紙面に載り、どのような印象を読者に与えるのかを研究することで徐々に自分の見せ方や講演の仕方を工夫していったと考えられる。インタビューとは受ける側からすれば自らが発信する言葉を直接多くの人に伝える手段であり、その影響と反応を即座に知ることができるものである。この新しいジャーナリズムの形は、現代のSNSとほとんど同じ性質を持っている。イギリスに帰国してからは5回しか受けていないことを考えると、自己承認の欲求を満たすというよりは自分のことを知らないアメリカ人たちに対して行う「見せる」行為としてインタビューを活用していたのであり、一種のセルフブランディングを行っていたと考えて良いだろう。

また、ワイルドが黒人や猿として風刺画に多く描かれたことは「外国人」であるアイルランド人であったことに由来しているとメンデルスゾーンは考察している。17世紀以来、主にイングランドの戯曲において、アイルランド人は滑稽な愚か者という典型的なイメージを作り上げられた。18世紀、19世紀にイングランドとの関係が悪化するにつれ、Melissa Fegan 著の *Literature and the Irish Famine 1845-1919* (2002) や Michael de Nie 著の *The Eternal Paddy: Irish Identity and the British Press, 1798-1882* (2004) でも論じられているように、アイルランド人は *Punch* などでは猿や獣として怪物のように描かれるようになっていた。

当時の新聞、雑誌のワイルドの捉え方は両極端で、彼の言動を真面目に取り上げるメディアと面白おかしく書き立てる *Washington Post* や *National Republican*、*Harper's Weekly* とに二分されていた。1882年当時、それらの記者や読者にとっては黒人もアイルランド人も「猿」であり、双方に違いはなかったと考えられる。

さらに、ワイルドがそのように描かれた背景には、1879年からちょうど

ワイルドがやってきた1882年までの3年間、アイルランドで起こった土地闘争も関係しているという。アイルランドが「本国」にあたるイングランドに反旗をひるがえしたことはアメリカ人にとって衝撃的であり、当事者ではないのにも関わらず、なぜかアメリカ人にとってアイルランド人は脅威となり続けていたとメンデルズゾーンは論じている。

18世紀末までに膨大な数のアイルランド人がアメリカに移住しており、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアがアイルランド人で溢れていたこともワイルドを人種差別的に揶揄することにつながった。アイルランド人は最も暴力的な移民であるというイメージが既にアメリカ人のなかにはあり、ワイルドはイギリスからやってきたとはいっても、彼らにとって「やっかいな」アイルランド人であることに変わりはないのである。この差別の延長線上にワイルドの講演に対する風刺があり、それは講演ツアーが進むにつれてどんどんエスカレートしていった。

このような状況にワイルドも甘んじていたわけではない。ハーバード大学の学生たちが自分を真似た格好をして講演を聴きに来る時には、わざと慣習的なタキシードを着用して本物との違いを見せつけることで観衆を味方につけて講演を成功させた。しかしこの学生も実はワイルドの仕込みで、唯美主義が面白おかしく取り上げられていることを逆手に取り、より魅力的な状況を提供して人の心を掴んでいこうとするなど、彼のセルフプロデュース力は相当のものである。とはいえ、この成功は他所でも同様に通用したわけではなかった。イェールやロチェスターでは散々コケにされ、さすがのワイルドも精神的にも肉体的にも疲弊し、ある時は友人と手紙を交わすことで、ある時は酒の力を借りることで気持ちを奮い立たせていた様子は、彼の賛同者と批判者双方のやりとりからリアルに浮かび上がってくる。

ホイットマンとの出会いや母との関係の変化など、本書では周辺の人びとの性格や背景も詳しく紹介しながらワイルドのアメリカ横断を追うため、群像劇のようにそれぞれが作用しつつ、いろいろな立場から「オスカー・ワイルド」が多面的に描かれている。ワイルドの言動のみに興味がある読者にとっては、それ以外の多くの人々に関する記述は冗長に感じることもあるかもしれない。しかし、ワイルドがあまりにも个性的でカリスマ性を

持っているために忘れてしまいがちなことではあるが、「オスカー・ワイルド」を作り上げたのはワイルド自身だけではなく、周りにいた人たちも大きな役割を担っていたということを、この本は私たちに気づかせてくれるのである。